

The 2nd
URAWA SPORTS
LITERARY PRIZE

POLE VOLT HIGHTHROW THE DISTANCE THROW
JOGGING DRINKING POWERBOAT
KENDO WEIGHT
KAYAKING BOAT
SWIMMING DIVE
PETANGUE KYLE
RIDING HURDLE
HANGGLIDER SI
ROADRACE BICY
MOTORCROSS RAY
ALPINE SKIING J
ICEHOCKEY KEE
JETSUING WATE
ARCHERY CAMP
BACKPACKING R
CYCLING TIGER
EQUINEPOLO POC
SPEEDSKATING J
BLINDMATH HAI
APRIL BIKES JESTO
SNOWKELING TE
WINDSURFING PI
BACKPACKING R
BICYC
BRON
KYOTO
DOTE
DON
K
SANDI
WATE
DIVING ROLLERSPORTS GYMNASIUM SWIMM
RALLY CARRAGE SNOW BOATING MOT
GO RAFTING CANOEING THEFTETS



Vol.2 SPORTS STORIES

浦和スポーツ文学賞受賞作品集

POLE VOLT HIGHTHROW THE DISTANCE THROW
JOGGING DRINKING POWERBOAT
KENDO WEIGHT
KAYAKING BOAT
SWIMMING DIVE
PETANGUE KYLE
RIDING HURDLE
HANGGLIDER SI
ROADRACE BICY
MOTORCROSS RAY
ALPINE SKIING J
ICEHOCKEY KEE
JETSUING WATE
ARCHERY CAMP
BACKPACKING R
CYCLING TIGER
EQUINEPOLO POC
SPEEDSKATING J
BLINDMATH HAI
APRIL BIKES JESTO
SNOWKELING TE
WINDSURFING PI
BACKPACKING R
BICYC
BRON
KYOTO
DOTE
DON
K
SANDI
WATE
DIVING ROLLERSPORTS GYMNASIUM SWIMM
RALLY CARRAGE SNOW BOATING MOT
GO RAFTING CANOEING THEFTETS
POLE VOLT HIGHTHROW THE DISTANCE THROW
JOGGING DRINKING POWERBOAT
KENDO WEIGHT
KAYAKING BOAT
SWIMMING DIVE
PETANGUE KYLE
RIDING HURDLE
HANGGLIDER SI
ROADRACE BICY
MOTORCROSS RAY
ALPINE SKIING J
ICEHOCKEY KEE
JETSUING WATE
ARCHERY CAMP
BACKPACKING R
CYCLING TIGER
EQUINEPOLO POC
SPEEDSKATING J
BLINDMATH HAI
APRIL BIKES JESTO
SNOWKELING TE
WINDSURFING PI
BACKPACKING R
BICYC
BRON
KYOTO
DOTE
DON
K
SANDI
WATE
DIVING ROLLERSPORTS GYMNASIUM SWIMM
RALLY CARRAGE SNOW BOATING MOT
GO RAFTING CANOEING THEFTETS

Vol.2 浦和スポーツ文学賞受賞作品集

SPORTS STORIES

工業学院図書館
藏书章



浦和スポーツ文学賞受賞作品集
SPORTS STORIES Vol. 2

平成 8 年12月20日 発行

発 行 埼玉県浦和市

〒336

埼玉県浦和市常盤 6 - 4 - 4

電話 048-825-1111 (代表)

編集協力
印 刷

株式 ぎょうせい
会社

〒167-88

東京都杉並区荻窪 4 -30-16

電話 03-5349-6633 (開発課)

浦 和
スポーツ文学賞
受賞作品集

SPORTS STORIES

Vol. 2

目 次

◆大賞◆

家族の球歴

.....
鳴あやし

5

◆優秀賞◆

山頂の激走

.....
西原健次

63

◆優秀賞◆

ケン

.....
米田 治

141

◆佳作◆

とべ！ブタツカー

.....
橋本憲範

199

◆佳作◆

小さな鉄人クリスマス

.....
黒田六郎

255

刊行にあたって……………浦和市長・相川宗一 330

◆選評◆

ヴァラエティに富んだ諸作品……………伊藤桂一 332

力作がそろった……………大谷羊太郎 334

スポーツ文学の可能性……………長部日出雄 336

持ち味の違った佳編揃い……………桂英澄 338

多様なアクセスがあつていい……………関川夏央 340

洗練された印象……………吉永みち子 342

◆資料◆ 345

本文挿絵●佐々木悟郎

装 幀●クラップス

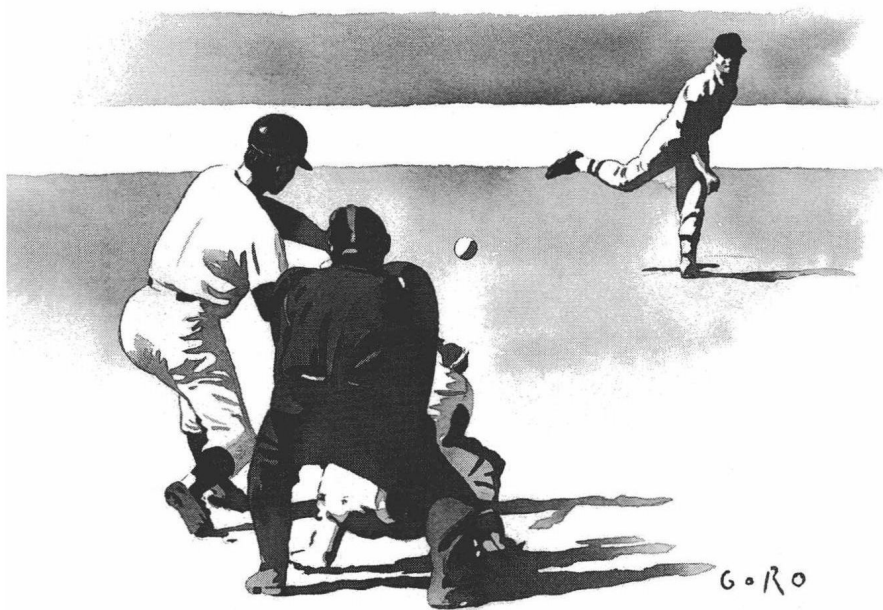
表紙写真●山岸勝彦／アフロ・フォト

エージェンシー

嶋あやし

大賞

家族の球歴



加茂君が中学校を尋ねてきたのは、十二月二十一日だった。

「市元先生、信用金庫の加茂さんて方がみえてますけど」
とりついでくれたのは教頭先生である。

「はい、すぐいきます」

あした生徒に配るはずの通知表を机のひきだしにしまいこんで、職員室を出ると、保健室のまえの廊下に加茂君は立っていた。

「すみません、裕子さん、学期末の忙しいときに」

名前を呼ばれてすこしドキッとした。会うのは半年ぶりだろうか。黒い大きな鞆と白いコートが、スポーツ刈りの彼にはどこか不似合いだった。

「応接室、あいてるんですけど」

「いや、ここでもいいです。ぼくもまだ用事があるし」

加茂君は背が高い。たぶん一九〇センチ以上あるだろう。一六〇センチに満たないわたしには、彼の顔は天井を見上げるほど高いところにある。

「あの、こんなん作ったんです」

そう言いながら彼が黒い靴からとり出した茶封筒には、テレフオンカードの束が入っていた。輪ゴムをはずして、加茂君は二枚をわたしに差し出す。

受け取ったテレカには、バックネットの上から撮ったものらしい無人のグラウンドの写真に、「イノシシ、ありがとう」と白い手書きの文字が印刷されていた。

「タカシらにも相談したんですけど、あまりいいアイデアもなくて」

「イノシシ、ありがとう、ですか」

「今年、いのしし年やしね。……それで、それ、おじさんにも渡してもらいたいんですけど」

「はい。よろこぶと思います」

「それじゃ、ぼくはこれで。おじやました」

わたしはもうすこし話していたかったのだけれど、そう言うと彼は大腿で歩きはじめた。「さよなら」も言いそびれて、わたしは校門脇の駐車場までついてゆく。紺のストラップに、白い靴下とスニーカーのとりあわせがちよっとおかしかった。白いコートも丈が短かすぎて、膝上までしかない。

大きな蘇鉄そでくのまえて、彼のほうがふりむいて話しかけてくれた。

「おじさん、元氣になりました？」

「はい、すこしは。でももう父も年だし」

「仕事は？」

「はい、ときどきは現場にも出てるみたいですけど。でも、家にいる日のほうがまだ多くて、以前のように……」

この一年、急に老けこんだ父親を想い浮かべた。家族にも、父の許に出入りする業者の人にも、ほとんど口をきかなくなった父は、一日中、工務店のソファにすわって、新聞を隅から隅まで読んでいる。

「そうですか……おじさんにそのテレカはまずいかな」

「いえ、いいんです」

「その白い字ね、監督さんが書いてくれたんですよ。ぼくら卒業して十年になるでしょ。十年たったら正月に同窓会をするのがうちの決まりだね。一月の十四日に集まるんですけど、ぼくが幹事になってしもうて。イチがいてたらパッパアと片付くのやろけど、ぼくは要領がわるうて」

「いえ、そんな」

「いや、ぼくはあかんです、こういうことは。いままでみんなイチがとりしきってくれ

てたから」

「はい」

「秋に監督さんから電話があつてね。今年はお前らやけど、いつにするんやつて。まだ決まってるんですつて言うたら、お前、幹事になって、さっさと決めろ言われてね。それであわててタカシらに相談して、十四日なら連休やから、そうしようかいうことになったんです」

「どちらで？」

「場所？ 監督さんのお宅なんです、毎年。それで、監督さんがイチの記念になにかせんとあかんのんとちがうかって。で、テレカなんです。いろいろ考えたんですけどね、あんまりいいことも思いつかなくて」

「それで、茂木先生が、イノシシ、ありがとうって」

「そう。俺は葬式に行けんかったから、せめてひと言書かせてくれつて。ほら、九州遠征してたでしょ、あの時。イチに申し訳なかったって、いつも言ってるんですよ。あの人、けっこう気にしいでね」

「はい。母が長い手紙もらつたつて」

「そうですか。監督さんはね、自分のあとをイチに任せてもええかもしれんて思うてたみ

たいですよ。あいつならぜんぶわかつてるからって」

「そうだったんですか。父に話したらよろこぶと思います」

「とにかく、そのテレカ、裕子さんから上手におじさんにも渡してください。ぼくらの気持ちなんです。ほんまに、ぼくらには野球しかなかったから」

「はい。みなさんによろしくおつしやってください。……うちも、その日が法事なんです」
「あ、そうですか、ぼくのほうこそみなさんによろしく」

加茂君は長身を窮屈そうに折りまげて、白い軽四に乗りこんだ。

「じゃあ、また」

「はい、また。さようなら」

軽くおじぎをしたら、クラクションをブツと鳴らして、軽四は校門を出ていった。イノシシ、ありがとう、か。一年がようやく終わると思った。父はこのテレカを手にして、どんな顔をするだろうか。茂木監督の武骨な白い文字をもう一度眺めた。

「……けど、このテレカ、わたしには使えへんわ」

小さく呟く声に合わせるように、五時限目終了のチャイムが鳴りはじめた。生徒はみな帰宅していて、校内は閑散としている。校庭に据えつけられた朝礼台まで歩いて、しばらくそこに立っていた。ほんとうにあつという間の一年だったけれど、わたしたち家族の二

十数年を想いつづけた一年でもあったと思う。校庭を風が吹きぬけていく。かつて兄が走ったグラウンドを、冬の風が吹きぬけていく。もうすぐ兄の一周忌だ。

2

兄はその風貌からイノシシの渾名あだなをもらっていた。太い首、厚い胸板、大きなおしり、骨太でそのうえにたっぷりと筋肉がついていた。わたしがいま勤めている中学校を卒業して、隣のT大付属高校に進学した。

加茂君は中学、高校と兄の同級生で、その六年間、野球部の仲間でもあった。中三の夏頃から背がずんずん伸びはじめて、高校ではあつという間に学校一番ののっぽさんになった。

「いやあ、また大きいなってる」

彼が家に遊びにくるたびに、母が大げさに驚いてみせた。

「朝起きたら、もう背が伸びてるんです」

本当に困惑しているようすで彼が答える。

野球部でも加茂君はスター選手だった。彼を見るたびに、わたしはテレビで見たアメリ

カ力の黒人陸上選手を想い浮かべた。兄とは対照的なほっそりとした体つきで、皆からはカモシカ君と呼ばれていた。一方、兄のほうは高校に入ると背が伸びなくなってしまう。いつもは合宿所生活だが、隔週末に帰ってくるごとに、ますますスマートになってゆく加茂君と、どんどんおじさんくさくなっていく兄とがおかしかった。

「なんで俺だけがイノシシやねん」

「そりや、兄ちゃん、しょうがないわ。兄ちゃん、ラグビーの選手みたいやもん」

「ちがう、なんで、あいつがカモシカ君で、俺がイノシシか言うてるねん」

「そやから……」

「そやから、なんで俺にはクンがつかへんのんか言うてるねん」

「クンつけたらええの？」

「お前につけてもろてもなんもならへん。合宿所のおばさんまで、俺にだけクンつけへんねん。タカシも一の瀬も、みんなクンがつくんぞ」

「ま、兄ちゃんがそれだけ親しみやすいということなんちがう」

「……俺もな、中学のときキャッチさえしてなかったら、もっとすらつとしてたかもしれん」

「そういう体形やから、キャッチャーしてたんとちがうん？」

「ちがう、その逆や。キャッチしてたから、横に大きくなって、ケツもでかいし、ごつつい顔やし。性格までキャッチになつてしもうて」

「キャッチャーの性格ってあるん？」

「ある、ある、大ありや。キャッチは相手のベンチ見て、相手の打者見て、味方のベンチ見て、味方の選手見て、最後にピッチャーの顔色見て、あっちこち見てばかりやねん。氣いつこうてばかりねんぞ」

「そやけど、兄ちゃん、キャッチャー好きや言うてたやん」

「そりや、おもしろいこともあるけどな。けど、キャッチはやっぱりいっぱいあきらめんとあかんねん。あきらめて、それからやっとおもうなるねん」

「ほんまは、ピッチャーしたかったん？」

「いや、そんなこと、もうとつくにあきらめてるけどな。俺なんか、いま、それどころやないもん……」

兵庫県の南西部にあるT大付属高校は、いわゆる野球の名門校だった。甲子園で優勝したこともあるし、プロの選手も出している。中学時代の兄は、キャッチャーとしてかなりすごい選手だったらしい。小さな町のチームでありながら、地区大会、県大会と優勝し、近畿大会まで出場したが、兄はその中心選手だった。父が仕事を休んで奈良県まで応援に

行き、何百枚も兄の写真を撮ってきて、母に叱られていたのを覚えている。

そして、中三の夏休みに、担任の上村先生が茂木監督と一緒に家にやってきた。父が応対したが、要するにT大付属高校へのスカウトだった。

「茂木監督はな、伸一がぜったいモノになるって言うとられた。頭がええって。近畿大会で見とられたらしいけど、あのリードと肩なら、モノになるて」

父はすっかりその気になっていたが、母はあまり気が進まないようすだった。

「そやけど、あんた、あそこはそうやってすごい子ばかり集めるんやろ。大阪からいっばい来てるらしいで。伸ちゃんがそこで負けたら、どうするん？　うちはな、伸ちゃん勉強もできるんやから、県立の普通科にいったほうがええ思うんやけど。それでな、そのあと家の仕事を継いでくれたら、うちはいちばん安心なんやけど。野球は県立でもできるんやし」

兄は黙っていた。

「伸一、お前、T大付属にいけ。男やったらプロ目指してみんかい。それでな、やってみて、失敗したら、それから大工仕事覚えたらええ。……わしの息子がプロになる思うたら、もうわくわくするねん、わし。ごっついで、そら」

家族会議はそれで終わった。兄は十二月に推薦入試を受けて、入学金免除でT大付属高